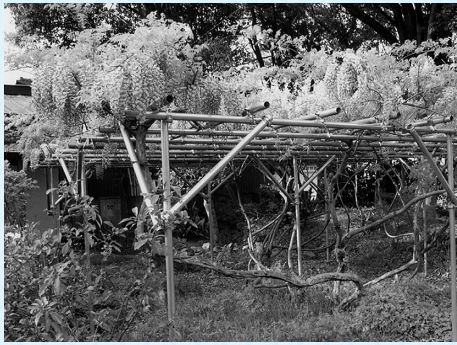


城里町の文化財さんぽ(三六)

町指定文化財(史跡)

「万歳藤」

指定年月日／昭和四十九年四月二〇日
所在地／城里町上坪 管理・所有者／個人



町指定文化財「万歳藤」は、徳川光圀が激賞して「萬歳」の名を与え、その家の屋号を「藤本」とするように命じたという由緒をもつ藤の木です。現在では、小規模になってしまいましたが、当時(三〇〇年前)は「枝の一部は大木に絡まり、一部は数十坪の地面を掩い、年々見事な花を咲かせる」という巨大なものでした。

元禄一〇(一六九七)年、光圀

は御前山方面からの帰途、上坪村の庄屋大森家にある大きな藤に目をとめ、「来年花が咲いたら報告するよう」命じました。

翌年四月、藤が開花したとの

報告を受けた光圀は、石塚の金剛院(現在は廃寺)を宿として大森家に出向き、満開の藤を楽しんだといひます。その際、当主父子は、光圀から藤の花にちなんだ「藤衛門・藤十郎・藤八」の名を賜わり、各々金二〇〇疋の賞与に預かっていました。さらに光圀は、毎年藤を見に来ることを約し、屋敷内に藤見のための亭(後に「垂纏亭」と命名される)を建設することにしたとされています。

それから約一三〇年後、徳川齊昭もこの地を訪れました。藤の幹はすでに枯れていましたが、根本に生える若芽を見て「咲く藤の花なき頃に 来てみればめぐみのもとにあるぞ 楽しき」の和歌を詠んでいます。

大森家には、現在も藤棚、垂纏亭の礎石と扁額、齊昭の和歌などが残されています。

解説文／町文化財保護審議会会長 小山映一

問合せ 教育委員会事務局

☎ 029-288-3135

俳句

退屈は倅せですとチュリッパ

鯉淵 寿美恵

足跡の波にのまれて春汀

今瀬 多代美

本物の目覚まし時計春の鳥

中野 千賀子

若者の破れジーパン揚雲雀

綿引 英子

春耕の畝黒々と明日を待つ

仲田 まちゑ

筍飯母の大きな手で握り

森 静江

川柳

那珂川の吊橋春の雪まぶし

飯村 昭子

朝桜追越してゆくイヤリング

竹内 幸子

春の雲解けほどこけて消へにけり

瀬谷 博子

デイまわり高低ならし桜花

岩下 金司

踊り子の見しか七滝天城越

田口 勝元

ゆづり合ひ板橋渡りあやめ園

寺門 孝子

宮使い主な仕事はしりぬぐい

富田 多蔵

申告書扶養家族は犬のポチ

車田 綾子

巷では「そだねー」めぐって大騒ぎ

飯村 孝一

鯉のぼり眺める子等も口をあけ

川原 清

文芸しろさと

短歌

電柱の天辺にカラス一羽居て
友呼ぶ如くカーカーと鳴く

所 美恵子

女孫ふたり大学進学めでたき
も家族わかれて寂しさのあり

山形 式妙

水色の丘にさそわれネモフィラ
の花に抱かれしはしくつろぐ

杉山 みちこ

らんらんと足早に春めぐり来
て孫はかたことの言葉を繋ぐ

大森 久子

境内に幾本咲けるさんしゅゆ
の黄の明るさに春確かなり

渡辺 千紗子

銀杏大樹芽ぶき桜も咲きさか
り釈迦祭り待つ寺はなやぎぬ

枝 不美

うら山の堀跡に咲く山桜夕
陽に映えて素々と散りゆく

島 愛子

「かざぐるま」の取材を受けて八
十五才の身に余る名誉と感ず

信田 育子

近所なる友が持ち来し花桃
の株を分けくれ早も十年

坪井 きよ子

誰が焚きて呉れたる香や春彼
岸夫の墓前に残り火燐る

萩谷 登喜子

山桜芽吹き淡き彩りもひ
とときの間よ一山冴ゆる

富田 佐智子



袴穿き看護学校卒業を孫は
飛び立つ信念抱いて

菌部 光子

わけもなく心ひかれる昼下が
り一人ぼっちの今日も暮れ行く

富田 欽子